

一九四〇年代における阿部知二の上海派遣：新出資料の紹介を兼ねて

蘇，冠維
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

<https://doi.org/10.15017/7170132>

出版情報：地球社会統合科学. 30 (2), pp.30-43, 2024-02-15. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University

バージョン：

権利関係：© 2024 SU Guanwei



論文

一九四〇年代における阿部知二の上海派遣

— 新出資料の紹介を兼ねて —

Abe Tomoji's Dispatch to Shanghai in the 1940s:
An Introduction to Newly Discovered Materials

2023年12月28日提出、2024年1月8日受理

そ かん い
蘇 冠 維

Guanwei SU

キーワード：阿部知二、日本文学報国会、大東亜文学者大会、上海派遣、巡回講演

1. はじめに

英文学者・翻訳家でもあり、小説家として知られている阿部知二について語る際、一つの要点になっているのは、「左傾」問題である。水上勲によると、阿部知二研究史上の一大懸案であるこの左傾問題を解明するには、「戦争体験と左傾の両者を一体化してみる視点がどうしても必要であろう」¹という。しかし、満洲開拓村の視察体験²(1939年4月末～5月中旬)、陸軍報道班員としてのジャワ徴用体験(1942年3月～1942年12月)、日本文学報国会による上海派遣体験(初めての上海訪問)、上海セント・ジョーンズ大学での出講体験(1944年9月末～1945年4月)といった四度にわたる「戦争体験」の全体像、また相互の関係についてはまだ明らかにされていないため、左傾問題への探求を実現するには困難な状況にある。

これまで、阿部の戦争体験についての論考は少なくないものの、その多くはジャワ徴用³と上海セント・ジョーンズ大学への出講⁴に絞ったものであり、満洲視察を中心に論じたものは田村修一の「阿部知二の満洲体験」(『阿部知二研究』(5号)、1998)一本の論文のみである。また日本文学報国会による上海派遣に関する論文も、竹松良明の「阿部知二の湖南作戦従軍」(『阿部知二研究』(20号)、2013)と、徐静波の「從北平到上海」(『近代日本文化人と上海1923-1946』華文出版社、2017)の二本である。そのため、阿部の満洲体験と上海派遣体験についての詳しい経緯とその全貌は、まだ明らかにされていないのが現状である。

以上の問題意識を踏まえ、本論は阿部の左傾問題を解明する一環として、従来から懸案事項とされながらもいまだ十分に解明されていない1943年から1944年にかけての阿部の上海派遣に関する詳細を検討する。そのために、

まず第二回大東亜文学者大会(通称「決戦会議」)の参加問題に焦点を当て、上海派遣に至る経緯を確認したうえで、日本ではアクセスが困難な「全国報刊索引」、「中国歴史文献総庫・近代報紙データベース」、「瀚堂近代報刊データベース」、「大成古紙堆」などのデータベースに収集された中国語資料、例えば新聞記事、エッセイ、小説、回想録、講演内容記録などを含む文献を幅広く扱うことで、研究史の欠落を埋めることを試みる。

2. 日本文学報国会と大東亜文学者大会

大東亜戦争⁵の開戦(1941年12月8日)から約半年後の1942年5月26日に、日本文学報国会が発足した。張泉『淪陷時期北京文学八年』(1994)では、日本文学報国会が創立するまでの経緯について、次のように概括している。

太平洋戦争が始まる前、日本には(中略)日本ペンクラブ、作家クラブをはじめ、130を超える文芸団体があった。1941年12月9日(正確には1941年12月8日：稿者注)に日本が真珠湾を攻撃した後、文学芸術部門は日本社会全体と同様に、ファシストの軍事統合の軌道に一気に乗せられた。内閣情報局と大政翼賛会文化部の働きにより、日本全国のさまざまな文芸団体は解散させられ、1942年5月26日に報道機関の地位を持つ統一組織、「日本文学報国会」が設立された。会員数は4000人を超え、日本文芸界のほとんどすべての人が含まれていた⁶。(拙訳⁷、下線は稿者による、以下同じ)

大東亜戦争の目的完遂のために文壇を挙げて政府に進

言し、協力する機関であるこの組織の性格について、戸川貞雄（日本文学報国会の元事業部長）が「日本文学報国会は、（中略）常に国家の要請するところに従って、国策の周知徹底、宣伝普及に挺身し、以て国策の施行実践に協力することを目的とする公益法人」と説明している⁸。張泉「関与“大東亜文学者大会”」によると、日本文学報国会の「根本的な目的は、（中略）アジアにおける日本の覇権を固め、『大東亜新秩序』を建設する任務を文学に担わせることであった」。しかし、「大会の趣旨に即した文学作品を生み出すことはおろか、定まった文学綱領や主張も掲げなかった。その主な活動は、『大東亜文学者大会』という茶番劇を三回にわたって演出したに過ぎない」⁹という。実際のところ、「国民座右銘」や、「大東亜戦争詩集・歌集」の編纂など、日本文学報国会は多岐にわたる活動を行った。しかし、「大東亜文学者大会」より重大な任務を帯びたものはないと言えよう。そのため、阿部の「決戦会議」への参加問題を究明するためには、まず三度にわたる大東亜文学大会についての簡潔な要約と後世からの評価について、紹介しておかなければならない。

日本文学報国会の働きかけにより、1942年11月に第一回の大東亜文学者大会（11月3日～10日東京、帝国劇場と大東亜会館）が催され、それ以降1943年8月の「決戦会議」（8月25日～27日東京、帝国劇場と大東亜会館）、1944年11月の「南京大会」（11月12日～14日南京、中徳文化協会）と、全部で三回開かれた。参加国・地域の候補となったのは、中国と南方占領地の文化人ではあるが、結局蒙古（内モンゴルにある親日政権「蒙古聯合自治政府」を指す）、満州（中国東北部にある親日政権）、中華民国（ここでは蒋介石の重慶政府ではなく、南京汪精衛政府を指す）といった、中国陥落区の代表を招集することにとどまった¹⁰。

1942年から1944年のこの三度にわたる大東亜文学者大会について、劉曉燕は次のように評価していた。「『大東亜文学者大会』は名目上、文学大会であった。しかし、戦時文化体制の一環として、大会そのものが政治的な意味合いに満ちており、むしろ各方面の政治的意図が収斂し、ぶつかり合う相撲場のようなものであった」。そんな中、「日本の意図は、この大会を利用して世界中から文学者を集め、『大東亜共栄』による文学・思想の規制を強要し、戦争に協力することであった」¹¹という。大会の成果について、王向遠によれば、「三回の『大東亜文学者大会』は、日本における中国の『思想・文化戦』の重要なステップであった。（中略）『大東亜戦争』『大東亜共栄圏』などの軍国主義戦争のプロパガンダに一役買い、中国の没落した地域にも一定の影響を持った。その意味で、（中略）日本の狙いは基本的に達成された」のである。しかしながら、「大会に参加した中国側の代表者の

中に、有名な文学者は一人もいなかった。（中略）中国文学界全体はおろか、没落した地域での影響力も限度があった。したがって、大東亜文学者大会を通じた日本の中国文学界への介入・浸透は、参会者たちへの浸透としか考えられない」¹²という。両氏の指摘からも分かるように、1942年6月のミッドウェー海戦で形勢逆転により敗北を喫して以来、敗北が長く続いていた日本は、戦況を覆すために、内地のみならず、大東亜文学者大会を通じて外地の言論、思想など、文化全般にわたって総力戦の軌道に急速に乗せようとした。しかし、大会出席者のほとんどが中国陥落区の無名作家に過ぎず¹³、中国の文壇や社会には、限定的な影響しか及ぼさなかったと言える。

3. 上海派遣の契機—決戦会議

日本文学者の総力を結集した日本文学報国会であるが、創立当初（1942年5月26日）、ジャワ滞在中の阿部を役員、或いは会員として指名してはいなかった。だが、1942年12月下旬になると、帰国したばかりの彼は評論随筆部会の幹事として選ばれたのである¹⁴。現時点では、阿部が任命されて以降どのような仕事に携わってきたのかは明らかになっていないが、徐静波の著書では、「1943年8月に開催された第二回大東亜文学者大会において、阿部は日本側の大会議員、つまり正式な代表として選出され会議に参加した」¹⁵と、僅かながら興味深い点が指摘されている。しかし、阿部の決戦会議への参加については、管見の限り先行研究が日本には存在しておらず、また、数ある阿部知二年譜や伝記においても、記録が皆無に近い。その理由の一つに、阿部の戦争体験についての調査不足が挙げられる。ここでは、まず幾つかの手がかりを頼りに、阿部の上海派遣の契機でもあるこの会議について少しでも触れていきたいと考える。

中華日報社発行の大会記録「第二回大東亜文学者大会概況」¹⁶、尾崎秀樹の『旧植民地文学の研究』¹⁷、そして桜本富雄の『日本文学報国会—大東亜戦争下の文学者たち』¹⁸において、「決戦会議」の大会議員・参加者リストに阿部の名が明記されている。また、新聞記事や彼自身が書いた幾つかのエッセイの中にも、参加した際の内容が記されていた。以下で「中国文化を探る阿部知二氏の来滬談」と、「中支文藝・印象記（一）」を頼りに、阿部の第二回大東亜文学者大会の参加問題を取り上げたい。

①作家阿部知二氏は（中略）次の如く語つた：（中略）上海に腰を据えてじっくり勉強するつもりだ、内地の文学者も決戦下の心構へはもうすつかり出来上つてゐるし一般国民の文化に対する要望もきはめて真摯

になつてゐる、先だつての大東亜文学者大会も三日間とも傍聴席満員の盛況で会議自体も真剣味あふれたものだつたが傍聴者の態度も実に真剣だつた、何しろ日華文化の交流を基礎づけるなど、いふのは大仕事だが、私もその真剣味でやつて見たい¹⁹。

②十二回（原文ママ：稿者注）の大東亜文学者大会に來た人々が、いはば大〇（一文字判読不能であるが、「童」だと推定できる：稿者注）になつて雑誌や新聞に日本の文物についての紹介をしてゐるのであり、この点だけでもあの大会の成果は大きかったと思はれるのだが中支（現在の中国華中地域²⁰にあたる：稿者注）全体として見れば、日本への理解認識はまだ浅いといはなければならぬ²¹。

「中国文化を手探る阿部知二氏の来滬談」が書かれた時期は、第二回大東亜文学者大会開催から三ヶ月後、つまり阿部が日本文学報国会の文化使節として上海に到着したばかりの頃である。『大陸新報』の記者に向けて「先だつての大東亜文学者大会」を振り返り、日中の作家が両国の友好親善と文化交流を促進するために懸命になっていた姿と同じように、自分もこれから「日華文化の交流」に真剣に取り組んでいきたいという決心を述べた。「中支文藝・印象記（一）」が書かれた頃、阿部はすでに上海派遣を終えて日本に戻っていた。三ヶ月間の上海滞在において、阿部は華中²²の知識人と接触し交流していく中で、彼らの日本に対する認識と理解の不足に気づいたのである。決戦会議の参加者は、日本文化の普及に多くの力を注いだにも拘わらず、中日両国の相互理解にはまだ長い道のりがあることを語った。以上の検討により、阿部が決戦会議に出席したのは確実である。では、それが上海派遣とどのような繋がりを持っているのかについて、以下で明らかにしていきたい。

『淪陷時期北京文学八年』において、張泉は次のように指摘している。第二回大東亜文学者大会から戻ってきた陷落区の知識人らを見て、「『籠いっぱい日本の風土・名勝・古跡などを讀えるような文章を持ってきただけであり、大東亜の文学建設をいかに構築するかについての取り組み案は全く見えなかった』と、風刺して批評をした人もいる」が、「いくつかの提案は確かに異なる度合いで実施されてきた」²³のである。たとえば、「第二回大東亜文学者大会の後、双方の文学使節を相互派遣すること」²⁴が、その一つに数えられる。実際「文学者や学徒の交換派遣」の提案が最初に持ちかけられたのは第一回大東亜文学者大会の時であった²⁵。しかし、それが確実に実施されたのは、決戦会議の後、具体的に言えば、

1943年10月頃であった。『朝日新聞』「日華文学の“大使”が決る日本から上海、北京に6氏派遣」（1943年10月6日東京朝刊）において、日中文学者の第一陣の交換候補が掲載されている。

日華文化交流がいよ／＼軌道に乗つて、兩國一流作家や新進文學者の第一次交換が本極りとなつた、これは形の上ではさる第二回文學者大會で實を結んだものだが、嘗て實現し得ざりし幾十年、幾百年の懸案が、その緒についたものといふべく、決戦下だけに一入意義深きものがある、人選そのほかの交渉はもつぱら日本文學報國會があたつたが、我方からの派遣作家は

【上海】阿部知二、小田嶽夫、久保田萬太郎、
小林秀雄

【北京】吉屋信子および眞船豊（未定）

の六氏で阿部、小田の兩氏は早速來月出發約二箇月滞在し、交代した久保田氏が同じく二箇月、さらに同氏に交代して小林氏が約三箇月彼地にとどまる、北京駐在の吉屋女史は約一年の豫定で、眞船氏の派遣も決定すれば數箇月にわたる豫定、これら六氏が第一陣として赴き、次々と常に北京、上海に少なくとも一名づつ日本文學界からの「大使」を駐在せしめるのである²⁶。

以上の記事から、日中文学者の初めて行われる本格的な交換は「第二回文學者大會で實を結んだもの」であることがわかる。日本側は、阿部知二、小田嶽夫、久保田萬太郎、小林秀雄を上海に、吉屋信子、眞船豊を北京に派遣することが決定した。そういった意味では、阿部と上海との因縁は、第二回大東亜文学者大会から始まったと言って良い。それゆえ、決戦会議への参加を触れずして、1940年代における阿部の上海体験を語ることはできないと思われる。以下において、新資料を手掛かりに、文化使節としての阿部の上海動向を究明していきたい。

4. 上海に到着するまでの空白

水上勲は『阿部知二研究』（1995）で次のように述べている。阿部の「太平洋戦争下での仕事ぶりがどうであったのか、その分析が必要だが、（中略）戦時下の上海における日本人と中国人、その他の人々の関係や動向など、あまりに資料が乏しく、今後の調査や研究に待たねばならぬことが多い」²⁷とある。それ以来、29年の歳月が経ち、近年ようやく本格的な研究の段階に入ってきたように思われる。『新聞で見る戦時上海の文化総覧「大陸新報」

文芸文化記事細目』(2012)の編著者の一人でもある竹松良明は、「阿部知二の湖南作戦従軍」(2013)において、阿部にとって最初の上海滞在に関わる『大陸新報』の記事を紹介した²⁸。徐静波の著書『近代日本文化人と上海1923-1946』(2017)では、さらに一歩進んで『大陸新報』の他に、中国語紙『申報』も加えて阿部の上海での動向を模索する試みが行われた²⁹。しかし、三ヶ月にも及ぶ上海体験の深掘りを実現するには、それだけでは不十分である。本稿では『大陸新報』や『申報』のみならず、『新申報』、『浙江日報』、『粵江日報』、そして雑誌『女声』、『両儀』、国立南京中央大学の週刊『中大週刊』など、相当量の記事や記録文などを読み進めた上で、1943年から1944年の上海派遣の足跡を確認しておく。

従来、阿部が文化使節として中国に滞在したのは1943年11月上旬から翌年の2月までの間であることがほぼ定説になっているが、具体的な日付はまだ明らかにされていない³⁰、また、先行研究では、阿部が11月の初頭に日本から上海に直行したと考えているようである³¹。以下において、幾つかの手がかりを通してそれらの事実を確かめておきたい。

前節にも引いた記事「日華文学の“大使”が決る日本から上海、北京に6氏派遣」(『大陸新報』1943年10月6日)において、「阿部、小田の両氏は早速来月出発約二箇月滞在」と記されている。しかし、その翌日(1943年10月7日)に中国語紙『新申報』³²で掲載された記事「日名文学者將蒞滬(日本で有名な文学者がまもなく上海を訪問)」³³では、全く異なった内容が報じられた。「上海で盛大な文学運動³⁴を立ち上げる大東亜文学大会の華中代表を支援するため、日本文学報国会は今月中に著名な文学者阿部知二氏を上海に派遣する予定である」という。二つの記事を合わせて読めば、彼が上海に到着する予定は、日本では11月初頭と報道されていたのに対し、中国では10月中と報じられていたことがわかる。柳雨生³⁵はおそらく中国側の記事を読んでおり、「阿部知二會見記」(『浙江日報』³⁶1944年1月9日)において、待ち遠しい阿部の訪中を期待しつつも、その日程が度々調整され、何度も繰り延べられたことについての失望を語った。

新聞紙で、阿部知二氏が中国を訪れて考察を行うというニュースを何度か目にしたが、彼のスケジュールは何度も変更され、なかなか来なかった。(中略)結局、北方が厳しい寒さになったばかりの時期に阿部氏は北平に到着し、間もなく上海にも行った。(中略)今回の北平では一週間滞在したが、寒さのため友人たちとの交流に重点を置いた。(中略)周豈明氏や周豊一に会った。(中略)そして、北京大学

の学長である錢稻孫氏にも会った³⁷。

「阿部氏は北平に到着し、間もなく上海にも行った」、「北平で一週間滞在した」という柳雨生の指摘と併せて、阿部自身が綴った文章「中支文藝・印象記(一)」の一部も一緒に援用しておきたい。「こんどの旅では京城(京城府・日本領朝鮮の一部を指し、現在のソウル特別市にあたる：稿者注)、北京でそれぞれ幾日かすごした後に中支に行つて、そこで三月ばかりあちこちを歩いたり人に会つたりしてゐた」³⁸とある。つまり、目的地は上海であるものの、それが最初の訪問先ではなかったことが明らかである。では具体的にいつ、そしてどの経路を辿って上海に到着したのかについて、妻宛の四通のハガキに詳細に記述されていたために、一部を抜粋してその有様を確認しておきたい。

①発信日：昭和18年10月28日

発信地：京城府・朝鮮ホテル

つい3日前に出たのに遠くまで来たもの。今朝ここに、明日講演、明後日北京に行く。

②発信日：昭和18年11月1日

発信地：北京市内一区西総布胡同

車中で二泊、今日の昼北京着。相変わらず美しい。

③発信日：昭和18年11月8日

発信地：天津市興亜第二区七号路安裕里四号

昨日7日天津に来、(中略)これから南京へ。数日後に上海に入る。支那はやはり多くの探究の主題を蔵している。

④発信日：昭和18年11月14日

発信地：中華民国南京市 首都飯店

10日朝上海着、翌日南京に戻った³⁹。

以上の検討から分かるのは、阿部が上海に辿り着いたのは1943年11月10日の朝であり、それまでに朝鮮(10月28日頃～30日)、北京(11月1日～7日)、天津(11月7日～8日)、南京(11月8日～9日頃)を経由したと考えられる。

阿部が上海に到着した当日、彼の住所に中国の女性文筆家熹と『女声』⁴⁰を創刊した佐藤俊子が訪ねて取材を行ったと思われる。ここに、熹の取材記録「阿部知二和豊島與志雄」(『女声』1943年11月)があり、当時の阿部の日程や問題関心を良く伝えてくれるものなので、訳出して取りあげてみたい。

日本の著名な文学作家阿部知二、豊島与志雄両氏が中国に來たニュースを新聞で読んだ時、私は思わず興奮した。先日、中国の文学者が日本で開催された大東亜文学者大会に参加し、日本の有名な文学作家も中国を訪れてきた。(中略) 佐藤俊子氏の紹介で、私はついにこの機会を得て、友好的な訪問を行うことができた。

(中略) 阿部氏は今回、「日本文学報国会」の派遣により中国を視察しているため、その任務と日程が私たちにとって注目されるものであった。

「明日か明後日には南京に行かねばならない。ただ、杭州にも行きたいし、日本に帰ってお正月を過ごしたい。ああ、このわずかな1、2ヶ月の間に、何も見ることができないかもしれない」と彼は言った。

(中略) 彼は一つのことに對してははっきりと意思を持っており、時には頑固だと思われることもあった。例えば、彼は話劇『飄』を見に行くつもりであったが、佐藤さんは『釵頭鳳』を見るように勧めた。しかし、彼はやはり『飄』を見ると言い、「まずはつまらないものを見て、それから良いものを見るよ」と言った。

私は彼に「上海に何日間滞在し、何をしたのか」を尋ねた。彼は笑って「恥ずかしい話だが、ここ数日はずっと交際ばかりで、真面目なことは何もしておらず、こんなに食べて飲んでしているのはみっともない!」と答えた。(中略)

「中国に來て、一番目を引くのは何だろうか。」

「(中略) 中国に來て、一番目を引いたのは、地域ごとに西洋色が漂っており、どこに行ってもこのようなものを見ることができるところ。(中略) 今、私は中国人の性格にさえも、このような西洋色が潜んでいるのではと思う。私は中国人が自分たちの文化を再建することができれば、さらに良いと考えている。そう思わないか。」⁴¹

「佐藤さんは『釵頭鳳』を見るように勧めた」にもかかわらず、「頑固」な阿部は「やはり『飄』を見ると言った」とあるが、この部分は極めて重要である。紙数の制限上、詳細に触れることは出来ないが、陳青深「淪陷時期上海的話劇創作」(1995)によれば、『飄』が舞台上で上演された当初、「登場人物の個性の重厚さが足りない」、「原作ほど深みがない」、「ストーリーを語っているだけ」⁴²などの酷評を浴びていたという。『飄』の代わりに『釵頭鳳』を薦めた佐藤俊子の反応と、「まずはつまらないものを見て、それから良いものを見るよ」という阿部のごまかしは、全て当時の風評を裏付けるものである。しかし、「翻訳と

翻案——漂浪雜記のうち」(1948)において、阿部は『飄』をそのようには全く見ていなかった、いや、むしろ高く評価していたことがわかる。

「風と共に去る」が、「飄」という名になつて、民國の革命軍が北伐の戦争をすすめているころの江南の都市の出來ごとになつていた、というような風であつた。(中略) 「飄」——「風と共に去る」が、ともに内亂のものだから、偶然にアダプトした、というだけではなく、レット・バトラやスカーレット・オハラの中國版が、上海の街には現實に生きているのにちがいない。物質の慾望、食慾、情慾、などが、きわめて人間臭く、あらわにたたかわされているような社會では、人間の行動や精神も、おのずから共通したものになるのにちがいない。そのことの上に立つて、翻案的態度も生れるのであらう。翻訳的であるか翻案的であるか、ということは、(中略) 社會そのものの性格に根ざしたことであるとおもわれてくる。文學の世界性というようなことも、觀念のことではなく、生活の問題である。これは重大な問題である」⁴³。

阿部の興味をそそったのは、『飄』というよりは、むしろその背後に潜む中国の異文化に対する受容の態度である。なぜかといえば、文中の「翻訳」は、西洋文化を咀嚼もせず鵜呑みにし、それを全面的に摂取していく営みで、それに対して「翻案」は、自らの伝統文化と西洋文化を有機的に整合して、そこから新たな文化を生み出すという創作活動である。上海の風土に根ざした衣食住をはじめとする暮らし、生活様式、価値観、立ち居振る舞いなどを基盤として、その上で西洋作品と有機的に融合し創作した翻案作品の好例が『飄』である。阿部が戦後に書いた幾つかのエッセイや上海のものの中で、この中国劇作家の柯灵が書いた最初の翻案劇『飄』は繰り返し取り上げられていた。例えば、『緑衣』(『新潮』1946年1月)と『大河』(新潮社、1947年6月)の主人公で、素人の話劇女優の李媚が出演した演目の一つにも『飄』がある。「奇跡ともいつていいかもしれないほど」という李媚の情熱的な演技に魅了された檜原遵次郎博士は、その不思議な演出の裏には「何かしらせつばつまつたやうな烈しい気がちらついてゐるらしい。しかも、(中略) 何かの目的に向かつて突きすすんでいつてゐるやうな、犯しがたい力がこもつてゐる」⁴⁴と感じ取った。これが、『飄』をはじめとする上海の翻案劇——社会変革の情熱に燃える若者たちによる演劇——に対する阿部自身の感情と共鳴の投影と言えよう。

後の創作への影響とともに、心に留めておかなければならないのは、阿部の上海派遣には使命が伴っていたということである。以下に挙げる『粵江日報』⁴⁵1943年11月15日の「阿部氏對記者暢談中日文化溝通問題（阿部氏が日中間の文化交流問題について記者に語る）」と、『大陸新報』1943年11月19日の「中国文化を手探る・阿部知二氏の来滬談」では、日本文学報国会が阿部に課した任務の内実と、彼自身が文学者として究明しようとした課題が明らかにされている。

①今回は命じられて中国に来て、日本の文化を中国に紹介するだけでなく、戦後の中国文化を日本国内に正確に報道し、中国の作家と可能な限り交流を図り、中日の文化交流を促進させたいと考えている。私は去年、南洋で軍務に就き、さまざまな報道活動に従事した。南方地域はかつて英米の勢力下にあったが、10人中3、4人は華僑である。そのため、大東亜共栄圏を築くためには、中国との文化交流を図らなければならないことを痛感した⁴⁶。

②日本文学報告会派遣の文化使節として中支を訪れた作家阿部知二氏は（中略）次の如く語った：北京へは度々行つたが、中支は今度が初めてだ。大東亜戦争の勃発以降ジャワに渡つて去年の暮れまで文化調査や対外放送などに従事してきたが、東洋文化の探究のため、日本と南洋の文化を対比研究するだけでなく、中国文化の研究を合わせて、三次方程式で行かなければならぬ、その意味で今度はいはゞ東洋文化への手探りといった気持ちでやつて来たわけだ⁴⁷。

「日本の文化を中国に紹介するだけでなく、戦後の中国文化を日本国内に正確に報道し、中国の作家と可能な限り交流を図り、中日の文化交流を促進」させることが、阿部に課せられた使命と見て良い。だが、注意しておかなければならないのは、両記事がともに阿部のジャワでの徴用体験（1941年11月～1942年12月）や文化工作に言及していることである。「東洋文化の探究」という課題を究明するためには、「日本と南洋の文化を対比研究する」だけでは、どうしようもなく、「中国文化の研究を合わせて三次方程式で行かなければならない」ことが、当時、阿部が提唱した比較文化の方法である。つまり、「南進政策」⁴⁸を背景にした南洋と日本文化の比較研究において、中国文化という要素が加わらなければ解明できない側面が存在していることを意味している。こうした問題意識が、後の講演会での内容にも影響を及ぼしていた。

現存する阿部の講演内容記録のほとんどが、日本・中国・南洋の連帯感を強調し、大東亜共栄圏を宣伝するものであることは特筆すべき点である。

5. 上海・南京往復の多忙な日々

1943年11月11日、阿部は列車で上海から南京へ行き、首都飯店で旅装を解いた。上海へ戻るまでに「中国側文士との交流会、邦人側には報国会興亜部主催の講演会に臨む予定」であることは『大陸新報』の記事「阿部知二来寧（寧とは南京の略語：稿者注）」⁴⁹で報道されている。

『新申報』に、「中央大學定期請阿部氏演講（中央大学は阿部氏の定期的な講演を懇請）」⁵⁰と題した記事があり、その内容は11月13日から17日まで、南京で行われる講演日程の予告である。また、内容の補足として『大陸新報』の記事「決戦下の日本文学・阿部氏首都で講演」⁵¹も参照として一緒に取り上げてみたい。13日の午後7時、阿部は第一国民学校で「決戦下の日本文化の構想について」と題した講演を約一時間半にわたって行った。「会場に集まった聴衆は約七百名」という大盛況の中で、阿部は「南方作戦従軍中の体験から勝者と敗者の文化の相違を語り、民族と民族、人と人のつながりによる和が決戦下の力強い文化を形成すること」⁵²を説いたのである。11月15日から17日の三日間、阿部は南京国立中央大学の学生を対象に「南洋文化と現代日本文学史」と題した講義を行った。以下で、中央大学の雑誌『中大週刊』⁵³に収録されたこの三日間の講演速記録を訳出して取り上げてみる。

本日貴校にお招きいただき、誠に光栄に存じます。小生は東京の明治大学で教鞭をとってきたが、二年前に大東亜戦争が始まったことで、軍隊に随従し、南洋のジャワに渡り、そこで一年間の滞在生活を送ってきました。（中略）南洋諸島の住民は、ヨーロッパ人の政治機構の下、束縛されて蹂躪されることになり、数百年来、南洋の土民も欧米思想に同化され、ますます酷くなり戻れない状況へと深化してしました。今回、大東亜共栄圏と欧米は正式な宣戦布告を行ったが、これはまさに、われわれ東アジアの抑圧された諸民族を、欧米人による桎梏から開放しようとする目的だと考えます。したがって、東は日本から西は中国やインドまで、南は南洋群島から北は満州国まで、東アジアの人たちは皆、同一のラインに立っており、欧米と戦うようになるわけだと存じます。（中略）今後の南洋、あるいはもっと広い目で東アジア全体を見ると、我々は一体どのようにして建設すればいいのか。それは、おそらく私たち中日二

大民族が、お互いに協力しなければならないと存じます。この点が、今日のスピーチにおける最も重要なポイントです⁵⁴。

『中大週刊』

阿部が南京から上海へ戻り、キヤセイ・ホテルに泊まったのは、1943年11月18日のことであった⁵⁵。当日の午後6時、中日文化協会上海支部は、阿部と豊島与志雄に歓迎の意を表すため、「華格臬路錦江川菜館」で日華文人懇談会を開催した⁵⁶。中国文壇側は「陶晶孫、魯風、周越然、潘予且、邱韻鐸、周黎庵、周毓英、關露、馮和儀」等が出席し、文協側は「周化人、林廣吉、柳雨生」等が出席したと『申報』1943年11月19日の記事「中日文協昨歡宴（日中文化協会昨日宴会を開く）」⁵⁷で詳細に報道された。

歓迎会の数日後、1943年11月22日の午後7時に、阿部は横浜橋青年館（上海）で「戦時下日本文化の動向」と題した講演を行った⁵⁸。おそらくその当日のことであろう、回想録「嵐のひびき」によると、「上海を立つて湖南の方に向かった（中略）その前の日のことだったと思ふが、ホテルの廊下でチャンドラ・ボース氏と肩がふれるほどにすれちがつた」という。そのわずかな一瞬で、彼はインドの独立運動家ボースの顔から、「強さと温情に満ちた表情の中に、なにやら深い悲しみの色が滲んでゐる（中略）それはただボース氏個人の悲しみの色でない。何百年の暴壓の下で呻吟してきたインドの人の悲憤憂悶が折重なつて、今このボースの一身のうちに凝り固まつてゐるのだ」⁵⁹と、一つの民族の苦難と抑圧の歴史を鮮烈に感じ取ったのである。ボースとのこの一瞬の邂逅は、小説『緑衣』や数多くの随筆の中で語られ続け、永遠なる一瞬として残されていた。

6. 湖南作戰従軍

1943年11月23日、阿部は上海を離れて南京へ向かった。その日の夕方、「中国の有名無名作家を打つて一丸総べてを戦争へ、建設へ集中する」ことを目的とした組織「中国著作者協会（仮称、後に数回の名称変更あり：稿者注）」の準備会議として、中日文化協会建国堂（南京）で日華文化懇談会が開催された。周化人、胡蘭成、柳雨生、周越然、沈啓無、柳龍光など、中国の政治家や文人が十数名出席し、推進役の久米正雄と、南京に到着したばかりの阿部を囲んで大いに賑わった。懇談会において、「『中国著作者協会』の結成については大体日本文学報国会の組織を取入れる」ことや、「できれば年末までには晴れの結成式を挙行すること」や、「準備委員会の設置、各地の作家にそれぞれ通牒を出す」ことなど、様々な意見の開陳

が行われたと、「中国著作者協会年内に結成」（『大陸新報』1943年11月26日）で報道された⁶⁰。

日華文化懇談会の翌日（1943年11月24日）、阿部と女流画家の村尾絢子は日本総軍報道部の依頼により、湖南の戦場に送り込まれた文化人の第一陣として漢口（湖北省武漢市内）へ赴いた⁶¹。日本文化協会・武漢支部の中国語雑誌『兩儀』⁶²に、「明大教授阿部智二（原文ママ：稿者注）氏來漢」と題した報告書が掲載されていた。それによれば、1943年11月26日の午後4時、漢口に到着した阿部と村尾に歓迎の意を示すよう、武漢支部は日中文化界の名士を招いて、五花賓館で座談会を開催した。席では、阿部は漢口へ向かう途中の見聞を語り、また従軍時の実地調査や、従軍報告資料に基づく写実文学の創作などについての意見を述べたという⁶³。

1943年11月29日に、二人はようやく湖南進攻作戦⁶⁴の最前線に到着したことが「阿部、村尾氏・前線〇〇到着（二文字の伏字は「常德」と推察できる：稿者注）」⁶⁵において掲載されている。ここで、湖南作戰従軍の具体的な行程を示す資料として、漢口へ戻る途中の阿部が日本の留守宅にいる妻に宛てた、1943年12月13日付の書簡を引いておきたい。「沙市栄徳（誤植、正確的には常德：稿者注）で二週間従軍、今漢口に戻り明日南京へ。上海での中日文化の仕事延び年内に帰れない。これも一文化人のご奉公、ご辛抱下さい」⁶⁶とある。談話記事「貴重な体験を得た・阿部・村尾両氏の湖南作戰従軍談」（『大陸新報』1943年12月15日）によれば、12月15日に、この二人は既に上海に戻っていることがわかる⁶⁷。

妻宛ての手紙に書かれた「上海での中日文化の仕事」というのは、おそらく『新申報』1943年12月26日の記事「團結全國文化界擬組織作家協會（全国文化界を團結させて作家協會を結成）」で言及した事柄で、この記事は、既に触れてきたことのある「中国著作者協会年内に結成」の続報と見て良いであろう。それによれば、「十二月の中旬」に、中国で文学者の一元的な組織を構築するための第二回準備会議が上海で開催された。前回の会議にも出席した久米と阿部に加えて草野心平も参加し、周化人、周越然、柳雨生らと協議した結果、第三回大東亜文学者大会（1944年）までに創立総会を開催することになったとのことである⁶⁸。記事の一部を以下に記す。

来年、我が国で第三回大東亜文学者大会が開催される予定であるため、南北各地の作家は全国的な協會を設立することを検討している。北平方面では、北京大学文学部の沈啓無氏などと華北作家協會の柳龍光氏などがすでに意見を交換しており、新民印書館の蒋義方氏も加わることで、既存の団体を廃止し、

作家協会の支部に組み入れる準備をすることが決定された。そして、上記の三氏を起草委員として選出し、協会草案の作成作業が開始された。上海方面では、今月中旬に周化人氏、周越然氏、陶晶孫氏、魯風氏、丘石木氏、柳雨生氏らが会談し、日本文学報国会事務局長の久米正雄氏、阿部知二氏、草野心平氏も参加した。協議の結果、年内に関係者全員に書簡で通知し、華北方面が起草した草案を検討するための会合を開催し、合意に達した後、翌年に成立大会を開催することが決定された。戦時文化宣伝政策綱要の推進において重要な貢献が期待されるため、国府宣伝局（南京汪精衛政府の宣伝局：稿者注）は、最大限の支援を提供することとなった⁶⁹。

『新申報』「團結全國文化界擬組織作家協會」

久米正雄が帰国する前夜（1943年12月20日）、日本文化協会は上海の「康樂酒店」で歓送会を催した。「久米正雄、阿部知二の両氏に加えて、著名な中国作家陶晶孫、魯風、周越然、丘石木、潘子且、柳雨生、馮和儀らも宴会に出席し」、「第三回大東亜文学者大会の準備と、政府に協力し、中国文芸協会を結成させる具体的な計画について話し合った」と、『申報』1943年12月21日の記事「中日文協滬會餞別久米正雄（中日文化協会上海分会が久米正雄を送別）」⁷⁰で掲載されているのである。

翌日の1943年12月21日午前10時に、阿部は日本文化協会の周事務局長の同行で国立上海大学の校舎を訪問し、大講堂で「文化之創造（文化の創造）」と題した講演を行った。そして、翌22日の正午に彼は、圓明園路の私立滬江書院で「新文化之奮鬥（新文化の奮闘）」⁷¹と題した演説をしたという。関連記事「日阿部氏赴校演講（日本阿部氏が大学で講演）」（『申報』1943年12月22日）を以下に記す。

日本文学報国会が中国に派遣した著名な作家阿部知二氏は、今月の初頭（誤植、正しくは先月の末：稿者注）に女流画家の村尾絢子氏とともに戦地調査のため漢口へ赴き、数日前に上海に戻った。西洋文学に造詣が深い阿部氏は、特に講演が上手なため、昨日の午前十時、国立上海大学の招待に応じて、日本文化協会事務局の周局長が自から案内され、山趙学長が懇切に招待した。また、同校の文学院大講堂での「文化の創造」を講義していただくことになっており、本日正午に、阿部氏が圓明園路の私立滬江学院にご臨席され講演することになるが、その盛況は推して知るべしであろう⁷²。

7. 杭州の印象

1944年1月6日の朝、国立浙江大学への招待に応じて、阿部は柳雨生などとともに上海から急行列車で杭州に到着した。そこでの日程を詳しく記した記事として、以下に『浙江日報』1944年1月7日の「日文学者阿部知二今在浙大講學（日文学者阿部知二が今日浙江大学で講演）」を取りあげてみたい。

日本文学報国会の命を受けて文化調査のために中国を訪れた日本の作家、阿部知二氏は北平、漢口、南京、上海を経由し、今日（誤植、文脈から見れば正しくは昨日：稿者注）、浙江大学の銭学長、および日中文化協会上海支部の企画部所長の柳雨生氏などとともに、急行列車で杭州に到着した。裏西湖の西冷ホテルに宿泊し、同日の午後、銭学長らの同行で西湖を観光した。夕方には、浙江大学（の代表：稿者注）、および呉越人文学会の銭慰宗氏、菊池三芳氏らが学内で宴席を設け、市内の文化人も出席した。宴会において中日文化協力や交流などの問題について話し合い、和気藹々とした雰囲気の中で楽しい時間を過ごした。阿部氏は昨年、文化宣伝活動のために南洋の最前線に赴き、今回は中国で漢口の最前線へ視察に行ったが、まさに第一線の文化戦士と言えるであろう。若手中国作家である柳雨生は、上海で「風雨譚」という雑誌を主宰しており、売れ行きは好調だ。本日七日の杭州訪問で、午前中は浙江大学で講演、午後は中日文化協会杭州支部の依頼で、公開講演を行う予定である。会場は興亜倶楽部の三階、時間は午後三時から、一般市民の参加も歓迎⁷³。

上記の引用によれば、杭州滞在中に、阿部は裏西湖の西冷ホテルに宿泊していたことがわかる。1月6日の午後、彼は浙江大学の銭学長と一緒に西湖を観光し、その夕方には杭州の文化人との文化懇談会に出席した。翌日の1月7日午前、阿部は浙江大学で講演を行い、それに続いて中日文化協会杭州支部の依頼で、午後3時から柳雨生とともに興亜倶楽部で公開講演を行ったという。この公開講演会に関する詳しい報道として、『浙江日報』1944年1月8日の「阿部氏等昨在興亜倶楽部演講（阿部氏らが昨日興亜倶楽部で講演）」があるが、それによれば、当日の会場には「小中学校の教師、高校生および会員が三百名以上」集まり、柳雨生が「日本人をどう理解するか」というテーマで演説した後、阿部は「東亜文化の理想」と題した講演を行ったと報じられている。講演内容は次のようなものである。

主席の徐季敦理事長の挨拶の後、講演が始まった。

まず柳雨生氏が「日本人をどう理解するのか」について演説し、それに続いて、阿部知二氏が「東亜文化の理想」について講演した。(中略)阿部氏は：一般的な意味での「東亜文化の理想」は、中国と日本がお互いを理解することは困難ではないという考えである。過去には誤解もあったが、今回の戦争を契機に却ってお互いに対する理解が進んだ。真摯な友情は古代から受け継がれてきた東洋の道徳を広めることができる。明るい東亜を築くためには、お互いの悪い所を改め、良い所を学び合う必要がある⁷⁴。

これら杭州での記憶に基づいた印象記風の創作「幻妖談——西湖の追憶」(1950年)は、「杭州大学文科の柳駿仁教授から、一度講演に來ぬかと招かれたのを幸いに、その名勝の地を訪ねてみることにした」⁷⁵から始まる。「柳駿仁」といえば、柳存仁(柳雨生の本名)を連想せずにはいられない。そのためもあって、虚構の手は加えられているものの、「幻妖談」は歴史の真実を垣間見ることのできる秀作でもあるといえよう。荒れ果てた古都杭州の街並み、過酷な環境で勉学に励む大学生、素朴なもてなし料理、月光と霧に包まれた夜の西湖など、これらひとつひとつが、杭州での記憶の断片が結晶化したものであり、1944年の杭州の歴史を如実に描き出しているものでもある。以下では、阿部の杭州及び杭州の大学生への印象に関する一節を取り上げたい。

柳さんは、流暢な日本語で⁷⁶、この古都も荒れてしまい、何のもてなしも出来ぬであろう、と詫びるようにいつた。じつさい、街の中は店などもさびれはて、ただごみごみとした感じで、汚れた服装の人々が、暗い顔をして右往左往しているという有様で、典麗な都市の面影を想像してた私を失望させた。(中略) 街から一歩外に出れば、湖岸の山々のあたりまで國府軍(汪精衛の南京国民政府の軍隊：稿者注)や共產軍のゲリラ隊が出没しているのだから、産業も商業も停止したまま、人々は戦禍のなかで喘いでいるのだ。(中略)

杭州大學は、静かなところにある、半ば毀れた洋館で、ある會社の本館と倉庫との跡、ということだった。(中略)私は、窓ガラスがみなこわれ冷風が自在に吹きこむ室に入り、柳さんの通譯で、三十人ほどの男女學生に向つて英國の文學や日本の文學など、感想を一時間ほど喋言つた。服装も悪い学生たちは、恐らく粗食でもあつたろうから、なおさらに寒かつたにちがいないが、それでも、穩かに聴きつづけてくれ、後の座談會では幾人かが質問をしたり

した。學生たちは、もはや交通も斷たれた方から來ているものも多く、この冬休にも、冷たい倉庫を寄宿舎として過すのだ、ということだつた⁷⁷。

『浙江日報』の報道を最後に、阿部の消息も途絶えてしまった。彼がいつ杭州を離れて上海に帰ったのか、また1944年2月のいつ頃、日本に戻ったのかについては、報道は見当たらなかった。

8. おわりにかえて

阿部は三ヶ月間の上海派遣の回想記について、「中支文藝・印象記(二)」(1944年3月3日)で以下のように回想している。

じつは私は北京、南京、杭州とかけて六つばかり大学を訪れて話をしたり、教師や学生と接したりした(中略)流石に「文」の国ほどあつて、今日のやうな社会状態の中にあつても、文化一般あるひは文藝に対して関心と愛情を有つ青年男女がはなはだ多いことを感じた。この点についていへば、我々が新中国の人々と文化によつて溝通し合はうといふ希望は必ずいつの日か立派に実をむすぶと信じていいのである⁷⁸。

役人口調⁷⁹で綴られたこの回想記は、時局性を帯び政治的意図が込められているものの、阿部の本音も隠されていたのである。単に生きることも困難な時代に、寒さにもめげず勉学に励む大学生や、文化や文芸に関する知識を求めるために講演会に集まった数百人の中国民衆が存在していた。言語は通じなくても、知識に対する共通の渴望を通じて、いつの日か日中両国の人々の心も結ばれるであろうと願う気持ちこそ、この三ヶ月間に阿部が抱え続けていた思いであろう。これら上海派遣期間に経験した出来事や、大学での巡回講演で感じた善意と感動が彼を駆り立て、敗戦間近な時期(1944年9月～1945年4月)に妻と幼い子供たちから離れ、上海での教師生活に独りで踏み出すことを決意した。この上海出講期についてはまた場を改めて論じることとしたい。

以上、長らく手つかずになっていた懸案、阿部の上海派遣における足跡と中国人との交流、さらにその契機となる第二回大東亜文学者大会の参加問題に着目し、『大陸新報』や『申報』のみならず、『新申報』、『浙江日報』、『粵江日報』、そして雑誌『女声』、『両儀』、国立南京中央大学の週刊誌『中大週刊』などの新資料を取り扱うことで、研究史上の空白を埋めることを試みた。さらに、阿部の

戦争体験における中国体験を掘り下げること、阿部知二研究における重要なテーマである転向問題を解明する重要な手がかりとした。字数制限上、これらの資料についての全文紹介や、転向問題の解明、そして満州視察体験研究は断念せざるを得なかったが、今後の課題とした。

付記

本論文は、九州大学大学院未来共創リーダー育成プログラム（GIPAD）と中国国家留学基金管理委員会（202208050080）の助成によるものです。

注

- 1) 水上勲「阿部知二における《戦後》——『抒情と表現』から『現代の文学』』『同志社国文学』、1994年、261頁。
- 2) 大久保明男「東亜操觚者懇談会に関する考察——「満洲国」代表の視点から」『人文学報（東京都立大学人文社会学部中国文化論教室）』（第518-12号）、2022年、16頁を参考。
- 3) ジャワ徴用体験について、入念な現地調査に基づいた木村一信の著書と論文を中心として、一定程度の先行研究が蓄積されてきた。木村による現地調査の成果としては、「阿部知二とインドネシア体験(一)——その事実を巡って——」(『立命館言語文化研究』（3巻3号）、1992年)、「阿部知二インドネシアへの旅——ヒューマニズムと逸楽と」(『作家のアジア体験——近代日本文学の陰画——』世界思想社、1992年)、「南方徴用作家の言説——〈ジャワ〉を中心として」(『日本研究』（15号）、2011年)、など数多くの論文の他、著書『南方徴用作家⑤ジャワ編阿部知二(一・二)』（龍溪書舎、1996年)と『南方徴用作家——戦争と文学』（世界思想社、1996年）などがある。
- 4) 上海出講（1944～1945年）についての研究は、池上貞子「阿部知二と張愛玲：日本占領下の上海にて」(『阿部知二研究』（4号）、1997)、竹松良明「阿部知二——一九四四年冬の上海」(『阿部知二研究』（4号）、1999)、「セント・ジョーンズ大学と阿部知二：昭和十九年冬の上海」(『阿部知二研究』（21号）、2014)、「『花影』論：阿部知二と佐藤俊子その他」(『阿部知二研究』（22号）、2015)、「戦時下上海の暗く寒い冬：阿部知二の中国滞在」(『アジア遊学』（205号）、2017) などがある。
- 5) 「太平洋戦争」という言葉は、当時の日本では一般的な用語ではなく、米国等の「the War in the

Pacific」の翻訳的語彙として戦後に一般化した呼称である。また、連合国側の立場では、「the War in the Pacific」は、1941年以前から展開していたとの主張もあるが、ここでは誤解を避けるために「大東亜戦争」という表現を用いることになった。

- 6) 張泉『淪陷時期北京文学八年』中国和平出版社、1994年10月、42～43頁。
- 7) 本論文における中国語文献の日本語訳がすべて拙訳である。
- 8) 戸川貞雄「社団法人日本文学報國會の成立」『文藝年刊』、1943年、4～5頁。
- 9) 張泉「関与“大東亜文学者大会”」『新文学史料』1994年、216～221頁。
- 10) 台湾と朝鮮文学者も出席したが、彼らはあくまでも日本代表として参加したのである。
- 11) 劉曉燕「文学与政治の博弈——“大東亜文学者大会”在南京」『中国現代文学研究叢刊』、2014年、31頁。
- 12) 王向遠「“大東亜文学者大会”与日本对中国淪陷区文壇の干預滲透」『新文学史料』、2000年、106頁。
- 13) 内山完造は『花甲録——日中友好の架け橋』（東洋文庫、2011年、420頁）において、「大東亜文学者大会があった。中国側から誰れが行くかと思うて居ったところ私の知ってるような文学者の名は一人も出なかった。曰く周越全（原文ママ、正確に言えば周越然：稿者注）とか播子且とか、陶元徳とか柳雨生とか、婦人で関露とか云うような人で、その団長が周作人とか云うて全く驚いた顔ぶれであったが、また当然でもあった。（中略）この大会に出席する文学者を紹介して呉れと云うことであったが、『折角ですが中国の文学者では名のある人で出席する人は一人もあるまいと思います』とお答えしたことがあったと思うが果してそうであった」とある。有名な文学者たちはそれぞれの理由で欠席した。例えば、周作人の場合、彼は三回の大会に出席することを引き受けたが、結局高血圧などの理由で一度も参加しなかったのである。（鄒双双「日本占領下の北京における文化人：錢稻孫と周作人を中心に」『近代世界の「言説」と「意象」：越境的文化交渉学の視点から』、2012年、334頁を参考。）
- 14) 竹松良明「阿部知二年譜」『阿部知二——道は晴れてあり』神戸新聞出版センター、1993年、223頁。
- 15) 徐静波『近代日本文化人と上海1923-1946』華文出版社、2017年、289頁。
- 16) 「第二屆大東亜文學者大會概況」『大東亜文學者大會』中華日報社印行、1944年11月、11頁。

- 17) 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』勁草書房、1971年、55頁。
- 18) 桜本富雄『日本文学報国会一大東亜戦争下の文学者たち』青木書店、1995年、232頁。
- 19) 「中国文化を手探る・阿部知二氏の来滬談」『大陸新報』、1943年11月19日、3頁。
- 20) 中国の華中地域は、湖北、湖南、江西、安徽、江蘇、浙江の6省と上海市を含む地域を指すことが多いが、狭義には初めの3省のみを華中として、他を華東とすることもある。
- 21) 阿部知二「中支文藝・印象記（一）」掲載紙不明、1944年3月2日、1頁。
- 22) 前掲注15に同じ。
- 23) 前掲『淪陷時期北京文学八年』、47頁。
- 24) 同上、48頁。
- 25) 前掲『日本文学報国会一大東亜戦争下の文学者たち』、195頁。
- 26) 「日華文学の“大使”が決る 日本から上海、北京に6氏派遣」『朝日新聞（日刊）』、1943年10月6日、3頁。
- 27) 水上勲『阿部知二研究』双文社出版、1995年、306頁。
- 28) 竹松良明「阿部知二の湖南作戦従軍」『阿部知二研究：城からの手紙』20号、2013年4月。
- 29) 前掲『近代日本文化人と上海1923-1946』、289-294頁。
- 30) 竹松良明「阿部知二の湖南作戦従軍」（15頁）では、「記事によれば十一月十一日に上海から南京に到着とあり、したがってその数日前頃に日本から上海に着いたものと思われるが、『大陸新報』の『人事往来』欄に阿部来滬（滬は上海の略語）の報告は見当たらない。この場合日本から空路で上海に入った可能性が考えられるが、その確認は今後の課題としたい」とある。一方、徐静波の著書『近代日本文化人と上海1923-1946』（290頁）では、竹松氏の質問に答えるかのように、阿部の「上海に到着した時期は11月上旬頃であるが、上海への移動手段が船なのか空路なのかは不明である。しかし、その頃、太平洋戦争で米軍が徐々に優勢になり、日本と上海およびその周辺地域を海路で移動することが危険になり始めた」と書かれている。以上のことから、両氏は阿部が日本から上海に直行したと考えていることがわかる。
- 31) 前掲竹松良明「阿部知二の湖南作戦従軍」15頁と徐静波『近代日本文化人と上海1923-1946』290頁を参考。
- 32) 歴史上、『新申報』は2つあった。ひとつは1916年

- に席子佩とイギリス人の共同出資で創刊されたもので、もうひとつは日本占領下の上海（1937-1945年）で発刊されたものである。その新聞は日本人の尾坂与市が社長を務め、そして日本海軍省の出資により、1937年10月1日に上海で創刊された。この新聞は、日本の中国侵略政策を宣伝することを目的とし、主に政治、軍事ニュースを掲載し、「千葉」、「北斗」といった特集欄をつけていた。1945年8月以降に休刊した。（劉晶「《新申報》與近代上海工人運動（1918-1921）」寧波大学修士論文、2012年、9頁を参考。）
- 33) 「日名文学大家蔣滬」『新申報』、1943年10月7日、2頁。
- 34) 「上海で盛大な文学運動を立ち上げる」とは、後にも触れるが、第三回大東亜文学大会の準備作業の一環として、中国で日本文学報国会のような一元的な文学組織を結成させる運動を指す。
- 35) 杉野元子「柳雨生と日本」(『日本中国学会報』55号、2003年、212頁)によれば、「柳雨生は太平洋戦争勃発後の上海文壇において、それまでは無名に近い存在であったのに、突如として頭角を現し、八面六臂の活躍をするようになる。また四二年から四四年まで三回開かれた大東亜文学大會にいずれも参加するなどして、日本人文学者と親交を結んだ」という。
- 36) 『浙江日報』：嚴北溟が主導する『浙江日報』は1941年3月12日に創刊されたのである。この新聞は浙江省政府主席の黄紹竑の支持で創刊され、一時的に省政府から補助金を受けていたが、黄は新聞の人事や編集に関心を示さず、補助金はすぐに打ち切られた。嚴北溟は新聞の発行人兼社長となり、財務と政治の責任を自分で負うようになった。この新聞も独立経営する民営の新聞となった。
- 37) 「阿部知二會見記」『浙江日報』、1944年1月9日、8頁。
- 38) 前掲注14に同じ、1頁。
- 39) 『阿部知二文庫目録 阿部知二遺族寄贈・寄託資料』、姫路文学館、1995年、155頁。
- 40) 『女声』は、田村（佐藤）俊子が主導する中国語の女性雑誌で、1942年5月15日に上海で創刊されたのである。主に女性とキャリア、家政、教養、演劇と映画、評論などのコラムに分かれ、女性にとって有益な文学を紹介したり、力を入れて女性が書いた作品を集めたりして、女性の活躍と女性の地位向上を目指していた。この雑誌の創刊は、女性が解放を追求し、地位を向上させる重要な一歩であり、フェミニズム運動の研究において歴史的価値がある。
- 41) 熹「阿部知二和豊島與志雄」『女声』（第2巻第8期）、

- 1943年11月、28～29頁。
- 42) 陳青深「淪陷時期上海的話劇創作」『上海戲劇』1995年、44～45頁。
- 43) 阿部知二「翻訳と翻案——漂浪雜記のうち」『新文学』、1948年1月、25頁。
- 44) 阿部知二「緑衣」『阿部知二全集』（第5巻）河出書房新社、1975年、158頁。
- 45) 『粵江日報』：広州陥落後の1942年5月10日に創刊された新聞である。
- 46) 「阿部氏對記者暢談中日文化溝通問題」『粵江日報』、1943年11月15日、3頁。
- 47) 前掲注13に同じ。3頁。
- 48) 南進政策は、大日本帝国の外地に対する軍事戦略を指している。1940年7月第二次近衛内閣の組閣にあたり、従来の戦略方針である「南守北進」（大陸進出を朝鮮、中国東北、シベリア等北方に求めようとした政策）が急遽「北守南進」（戦略物資を求めて南方地域を確保しようとした政策）へと変わった。
- 49) 前掲注26に同じ。4頁。
- 50) 「中央大學定期請阿部氏演講」『新申報』、1943年11月14日1頁。
- 51) 「決戦下の日本文学」『大陸新報』（1763号）、1943年11月15日、4頁。
- 52) 以上の内容は上記の「決戦下の日本文学」を参考。
- 53) 『中大週刊』：（創刊時期、休刊時期、休刊理由は不明。館蔵の最終号は1945年の第139号である）この週刊誌は、汪精衛政府が創立した国立中央大学が、日本占領下の南京で発行した学内刊行物である。『中大週刊』には当校の毎週活動が記録されていた。
- 54) 施槃斎記録・麓保孝訳「阿部知二先生演講紀・新東亜文化之建設」『中大週刊』（第111号）、1943年12月6日、1～2頁。
- 55) 前掲注19の「中国文化を手探る・阿部知二氏の来滬談」を参考。
- 56) 「日華文人懇談」『大陸新報』（1768号）、1943年11月20日、3頁を参考。
- 57) 「中日文協昨歓宴」『申報』1943年11月19日、3頁。
- 58) 「阿部知二氏講演会・今夜青年館で開催」『大陸新報』（1770号）、1943年11月22日、3頁を参考。
- 59) 「嵐のひびき」『週刊朝日』（45巻9号）、1944年3月5日、6頁。
- 60) 「久米氏が産婆役・中国著作者協会年内に結成」『大陸新報』（1774号）、1943年11月26日、4頁を参考。
- 61) 「阿部前線へ」『大陸新報（日刊）』、1943年11月24日、4頁と、「阿部氏漢口着」『大陸新報（日刊）』、1943年11月29日4頁を参考。
- 62) 『兩儀』は、1941年に武漢で設立された中日文化協会武漢支部の機関誌である。創刊は1941年7月15日で、中国語編集長は芮道一で、日本語編集長は内田佐和吉である。月刊誌『兩儀』は日本人の支持の下で、「中日友好」を宣伝するために創刊され、その宣伝に関わった記事が多くあった。
- 63) 「第四組工作報告：明大教授阿部智二氏來漢」『兩儀』（第4巻第3期）、1944年4月30日、26頁。
- 64) 湖南侵攻作戦とは、後に常德殲滅作戦（中国側では常德会戦）と呼ばれ、日中戦争中の1943年11月から12月の間に行われた、湖南省北部での日本軍と中華民国軍（蒋介石の軍隊）の戦闘である。
- 65) 「阿部、村尾氏・前線〇〇到着」『大陸新報（日刊）』、1943年12月1日、4頁。
- 66) 前掲『阿部知二文庫目録 阿部知二遺族寄贈・寄託資料』、155頁。
- 67) 「貴重な体験を得た 阿部・村尾両氏の湖南作戦従軍談」『大陸新報（日刊）』、1943年12月15日、3頁。
- 68) 「團結全國文化界擬組織作家協會」『新申報』、1943年12月26日、1頁。
- 69) 前掲注55に同じ。1頁。
- 70) 「中日文協滬會餞別久米正雄」『申報』、1943年12月21日、3頁。
- 71) 講演のタイトルだけは、「日著名作家久保田氏抵滬」『申報』、1943年12月23日、3頁を参考。
- 72) 「日阿部氏赴校演講」『申報』、1943年12月22日、3頁。
- 73) 「日文学者阿部知二今在浙大講學」『浙江日報』、1944年1月7日、7頁。
- 74) 「阿部氏等昨在興亜俱樂部演講」『浙江日報』、1944年1月8日、7頁。
- 75) 阿部知二「幻妖談——西湖の追憶」『藝術新潮』（1巻2号）、1950年2月、133頁。
- 76) 杉野前掲論文（222頁）において、「柳雨生は周作人と同様に語學が堪能で、英語、日本語に精通し、ドイツ語、フランス語も相當高い力を有する」（誤字は原文ママ）とあることから、「流暢な日本語」が話せる柳駿仁は柳雨生のことである可能性が高い。
- 77) 前掲「幻妖談——西湖の追憶」、154頁。
- 78) 「中支文藝・印象記（二）」、1944年3月3日（切り抜き記事であり、掲載紙名・ページ数不明）。
- 79) 「中支文藝・印象記」は、文学者というよりはむしろ役人の立場から書かれた上海派遣報告文であるため、ここでは「役人口調」と表現している。

参考文献

【日本語文献】

- 阿部知二（1975）『阿部知二全集』（第5卷）河出書房新社。
 阿部知二（1950）「幻妖談——西湖の追憶」『藝術新潮』
 1（2）:133-144。
 阿部知二（1948）「翻訳と翻案——漂浪雜記のうち」『新
 文学』5（1）:24-28。
 板垣信（1992）「大陸開拓文芸懇話会」『昭和文学研究』
 25（0）:83-92。
 内山完造（2011）『花甲録——日中友好の架け橋』東洋
 文庫。
 尾崎秀樹（1971）『旧植民地文学の研究』勁草書房。
 小谷野敦（2011）『久米正雄伝・微苦笑の人』中央公論新社。
 桜本富雄（1995）『日本文学報国会——大東亜戦争下の
 文学者たち』青木書店。
 杉野元子（2003）「柳雨生と日本——太平洋戦争時期上
 海における「親日」派文人の足跡——」『日本中国
 学会報』55:211-225。
 鄒双双（2012）「日本占領下の北京における文化人：錢
 稻孫と周作人を中心に」『近代世界の「言説」と「意
 象」：越境的文化交渉学の視点から』4:321-348。
 竹松良明（1993）『阿部知二——道は晴れてあり』神戸
 新聞出版センタ。
 竹松良明（2013）「阿部知二の湖南作戦従軍」『阿部知二
 研究：城からの手紙』20:16-24。
 戸川貞雄（1943）「社団法人日本文学報国会の成立」『文
 藝年刊』2603:4-5。
 水上勲（1994）「阿部知二における《戦後》——『抒
 情と表現』から『現代の文学』』『同志社国文学』
 41:260-272。
 水上勲（1995）『阿部知二研究』双文社出版。
 姫路文学館編（1995）『阿部知二文庫目録 阿部知二遺
 族寄贈・寄託資料』姫路文学館。

【中国語文献】

- 王向遠（2000）「“大東亜文学者大会”と日本对中国淪陷
 区文壇的干預滲透」『新文学史料』2000（3）:96-106。
 熹（1943）「阿部知二和豊島與志雄」『女声』2（8）:28-29。
 徐静波（2017）『近代日本文化人与上海1923-1946』華
 文出版社。
 施燦齋記録、麓保孝訳（1943）「阿部知二先生演講紀・
 新東亜文化之建設」『中大周刊』111:1-2。
 中華日報社編纂室編（1944）『大東亜文學者大會』中華
 日報社印行。

- 中日文化協會武漢分會出版組（1944）「第四組工作報告：
 明大教授阿部智二氏來漢」『兩儀』4（3）:25-27。
 張泉（1994）『淪陷時期北京文学八年』中国和平出版社。
 張泉（1994）「関与“大東亜文学者大会”」『新文学史料』。
 陳青深（1995）「淪陷時期上海的話劇創作」『上海戲劇』
 1995（03）:42-45。
 劉曉燕（2014）「文学与政治的博弈——“大東亜文学
 者大会”在南京」『中国現代文学研究叢刊』2014
 （1）:19-32。
 劉晶（2012）『「新申報」與近代上海工人運動（1918-1921）」
 寧波大学修士論文。

Abe Tomoji's Dispatch to Shanghai in the 1940s: An Introduction to Newly Discovered Materials

Guanwei SU

Abstract

The developments related to Abe Tomoji's three-month dispatch to Shanghai and his participation in the preceding Second Greater East Asia Writers Congress are two long-unresolved issues. To resolve these issues, this study attempts to fill in the gaps in the literature by examining new materials, including not only Tairiku Shinpo and Shen Bao but also Xin Shen Bao, Zhejiang Ribao, Guangdong Ribao, the magazines Nu Sheng and Liang Yi, and the weekly journal Zhong Da Zhou Kan of the National Central University of Nanjing.

Keywords : Abe Tomoji, The Patriotic Association for Japanese Literature, The Greater East Asia Writers Congress, Dispatch to Shanghai, Lecture Tour